

空



2004年

**SORA** 7号

晴夜 (7) | 1

柴田 佐知子

道問へばまなざし強き草刈女

雨脚の間を山の蟻走る

阿蘇に立つ夜の噴煙きりぎりす

ももいろの脚を短く小鳥くる

一族に家系 凶ひとつ 鱗雲

白昼のしづけさ猪垣の内も外も

鶏小屋に机突つこむ秋出水

焼き上げて秋刀魚の頭のみ青し

# ひと日

高倉 和子

涼を呼ぶもの一つに青畳

山滴る我が声われに戻りくる

後ろめたき人と会ひたる冷房裡

虫干しの母口遊ぶ唄のあり

窓を這ふ守宮や長き文を書く

自問のみ増えゆく夜の簾かな



萌

力抜くことも養生稲の花

尾の長き鶏の飼はるる夏館

白昼の有無を言はさぬ暑さかな

父の影に母は屈みて門火焚く

鶏頭に触れてゆくとき人恋し

青空や色のこぞりし大花野

夕暮の線路は遠し赤のまま

病む母のひと日長かり花芙蓉

秋思また荒野へ続くばかりなり

今年の夏の暑さは異常だ。病みがちな母には応えるらしく何もする気力が起きないと元気がない。しかし、農家の日常は忙しく、本人曰く老体に鞭打って働いているという。あまり無理をせずゆっくり休むように言うのだが、私がしないと誰もしないと文句を言いながらも働いている。

体のことは心配だが働いている母の姿はこちらまで元気にさせてくれる。まだまだ母に教わることはたくさんありすぎて追いつくことなど出来そうもない。

## 蛇のゆめ

中田みなみ

歲月の手配写真や梅雨の駅

山毛櫨は父みづ楢は母山開き

鞆より似合ふ服出し天の川

朝焼や鴉の羽根の降りて来し

黒き羽根拾ひで捨てて夏の町

蔵町を巡りてゐたりサンダラス



遠野 萌 様

薄みどりの野山が霞の中から見えて来る様な素敵なおペンネームですね。私は今迄に貴女にお逢いした事があるのでしょうか？無いのでしょうか？それが判らないところが又何とも楽しいのです。

毎号のそれぞれの作品に相応しいカット、感心して拝見しています。五号の私の句には、ワインとグラスと開いた本。六号には金魚鉢。それも金魚がうれしそうに泡を吹いています。

遠い昔、私は少しばかりの収入が欲しくて、一時期下手な画を描いていた事がありました。終戦直後ミシン会社の宣伝

蚯蚓死す迂かと灼けたる路へ出て

蟻に菓子こぼせり家のなき男

川砂に腹を冷やして蛇のゆめ

気短な掌に抗ひて草虱

袋蜘蛛つながり出でし忘れ傘

贗物のダイヤの反射カーニバル

腰揺らし雨を弾けりカーニバル

水中花むかしの恋を聞いてをり

曝したり北辰一刀流免許

部に就職した伯父が、毎月発行する広報のパンフレットを安く上げたいらしく、私に製図を依頼して来ました。それか先ず、ブラジャーだったのです。それまでの日本人は（私も勿論のこと）殆んど付けた事がありませんでしたから、知人の米婦人からお古を頂いたが、そのまあ大きいこと。苦心惨憺して一般の日本人のサイズに直しながら製図しました。

次は当時、アメリカで流行し始めているドルマンスリーブの服との注文で、これも見た事もないので、手蔓を求め、銀座の進駐軍のPXに潜り込み、こっそりメージャーを出して計ってみて製図し載せました。そのうちに会社も一人二役にしようと考えたらしく、今度は最新のスタイル画を毎号二着ずつ描く様に頼まれて、どうやら納めたのですが、そそっかしいので記名を忘れてしまいました。ところが刷り上りを見ますと「美土路画」となっているではありませんか。伯父に訊ねましたら、自分の初恋の人の名にしておいたと答えたのでした。遠い遠い昔の想い出です。



空集

柴田佐知子選

三面鏡あやつる真昼竹の秋

服部早苗

朝顔の双葉の留守をたのまるる

蛇苺おちよぼ口して摘みにけり

金魚藻のゆらぎのなかの婚支度

那智黒の碁石の艶も夏至のころ

形代に雨の一滴印さるる

異界への手掘り燧道立葵

白神山地二句

洞蔵す櫛の巨木の茂りかな

幸田綾子

太古のままに巨木岩肌滴れり



五能線車中夕虹の日本海  
北上川夕焼の村を貫けり  
啄木の追はれし郷の花ふうろ  
ななかまど咲き駅の名は「阿仁マタギ」  
倒産の会社に残る金魚鉢  
炎帝や壊されてゐる百貨店  
中庭に菩提樹いつぼん寺の夏  
臍見せる仏の救世や沙羅の花  
検査待つ患者に大いなる金魚  
医学部の窓は木造りねむの花  
あくまでも硬き蹠や雲の峰  
光りつつ蜥蜴逃げゆく首たてて

辻 兎 夢

真中比呂子

雨乞ひの耶穌のオラシヨか潮騒か

荒井千佐代

生月島の隠れキリシタンの資料を集めた「島の館」でオラシヨを聞いたことがある。その祈りは低くうねるような響きであった。掲句は長崎という地によつて覚まされる感覚が成したものかもしれない。敬虔なクリスチャンである千佐代さんは、長崎という地をしかと踏みしめ、独自の境地を更に深めていられることと思う。

ひとなでの赤子の髪を洗ひけり

苑 実耶

水のようなガーゼで、赤子の頭をひとなで。ほわつとした髪は濡れてしまふと有るのかないのか分からないほどである。赤子は気持ちよさそうに小さなあくびをしているかもしれない。「ひとなで」の表現が適確。

サングラス迷ひて人の言ひなりに

遠野 萌

考えて考えてさんざん迷つたうえに「人の言ひなりに」なつてしまうことは案外多いのではないだろうか。決断が着かない時は人の意見にぐらついて流されることもあるものだ。サングラスの置き方も面白い。精進いちじるしい萌さんである。

雨三日つづきぬ我も水中花

秋 千晴

水の中でひらき、そよぎもせぬ水中花。三日間降り込められて自分も水中花となつてゆく。身も透けてゆかんばかりに。稀有な水中花の一句。

蟻進む神輿のごとく虫担ぎ

小林 朱夏

朱夏さんの句はいつも弾むがごときリズムがある。いきいきとした眼差しがとらえた蟻の列は何と

も楽しそうである。

形代に雨の一滴印さるる

服部 早苗

形代にぼつんと雨。雨粒はたちまち紙に吸われ明らかに色を変える。一気に詠み下した「一滴印さるる」が揺るがない。削ぎ落とした表現の力が漲る。

音立てて富士山籠の水ぬるむ

永原 朱

富士の裾に噴出す清冽な水。その水もぬるむ春のおとずれである。「水ぬるむ」はやさしく詠まれることが多い季語であるが、朱さんの句はスケールが大きく堂々たる骨格を備えている。こののびやかさは貴重である。

一村が野鳥の保護区あたたかし

田中 せつ

山懐にあるような村である。野鳥の保護区なのだ、自然豊かな人の暮らしも保護されているように思えてくる。まさにあたたかし。

内股の馬先頭に夏祭

ふじの 茜

内股にこの句が出たとき、ひとりが言うには「馬はみんな内股ですよ」…そうだったかしらと馬の姿を思い浮かべる句座の面々。しかし「馬の内股」と詠みとめることで、夏祭の景がいきいきと現れる。馬がかしこまつて祭の先頭を肅々と歩いていっているように楽しい。

子ら去りしあと空蟬の暗き木よ

永原 彰子

笑ひつつ蒲公英の絮吹かれゆく

葉山 美香

蟬時雨今日も異界に目覚めけり

川上 義則

咳一つ湯呑み茶碗を二つ割る

神谷 耕輔